

## 「徳富蘇峰の会・熊本」設立

肥後熊本の地は、幕末維新より今日まで、横井小楠、宮部鼎蔵他数多くの才能豊かで傑出した人物を輩出して来ました。有名無名にかかわらず、そうした先駆者たちは、日本の近代から現代の歴史の中に多彩な光を放ち続けています。

今般、郷土の偉人にして、明治・大正・昭和を通して、ジャーナリスト(新聞人)として、また政治思想家及び歴史記述家として、ひときわ鮮やかな光跡をのこした徳富蘇峰の顕彰を期して「徳富蘇峰の会・熊本」を立ち上げます。

徳富蘇峰は、文久3年(1863)に生まれ、昭和32年(1957)に94歳で逝去しています。幼少期より肥後の先哲、元田永孚、兼坂止水らの薫陶を受け、論語、大学等の古典漢籍に親しみ、同志社では新島襄を師として西洋の書・精神に触れ、明治15年(1882年)19歳で大江村に民間私塾大江義塾を開校しました。進取の精神たくましく、人格陶冶と思想形成に努め、青年に熱い心を吹き込みました。

蘇峰の意気は高く、東京に進出し、平民の世を開こうと全国の青年に呼びかけ、国内で初めての文学・政治の総合雑誌社民友社を設立、また新たに創刊した国民新聞の新企画は近代文学や新聞ジャーナリズムの起源であり育ての親といって過言ではありません。

明治・大正・昭和の激動期に当たり、西欧列強全盛の国際社会は、弱肉強食の生存闘争が繰り広げられていました。日本と日本人の進路はあたかも海図なき大洋を羅針盤なき帆船で突き進むように、波乱と混迷に満ちた暗夜行路だったのです。日本は世界の国と対等になるようにと「文明開化」と「富国強兵」を持って切り抜けようとし、世界の中で苦心惨憺し、様々な試行錯誤を重ねました。この状況下において「文明開化」の水先案内人を代表する一人が蘇峰でした。

また、文明開化の当事者として、また日本の歴史と伝統文化を揺るぎなく継承するものとして、徳富蘇峰は、55歳で筆を取り始め約40年をかけて著した歴史書、全百巻「近世日本国民史」等、精緻かつ膨大な量の著作と足跡を遺しました。

現在の国際環境は、国益偏重、パワーゲームが主流です。この変動する時代の潮流の中で、生き続けるために最良の理性的選択肢を探し出すため、徳富蘇峰が生きた明治・大正・昭和の歴史を偲び、蘇峰の足跡を訪ねることは現代に求められている意義・課題と考えます。

広く会友を求め、相互の親睦と研鑽を重ねて、郷土の偉人を顕彰する機会となりましたら幸いに思います。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

以上